

関西学院大学 研究成果報告

2024年3月28日

関西学院 院長殿

所属：社会学部
職名：教授
氏名：内田 充美

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国：アオテアロア・ニュージーランド）
研究課題	海を渡った印刷技術とビジネス--異文化共存・言語接触の観点から
研究実施場所	Victoria University of Wellington / Te Herenga Waka (New Zealand)
研究期間	2023年3月1日～2024年2月29日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要（2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

研究課題の実施にあたり、大きく分けて3つの研究領域にわたる活動を行った。第1に、異文化共存と言語接触についての知見を拡大するために、社会言語学の専門家との交流を行い、情報収集と文献調査を行うこと、第2に、アオテアロア・ニュージーランドにおける印刷の歴史についての知見を拓げるために書誌学（書物史）／メディア研究の専門家との交流と情報収集、現地調査を行うこと。これらに加え、第3に、同国における社会言語学研究において不可欠である、先住民族の言語文化と、西洋文化との接触についての史的事実についての知識と認識を更新すること。

【第1の領域】

ヴィクトリア大学のSchool of Linguistics and Applied Language Studiesの社会言語学者 Meredith Marra教授、Janet Holmes名誉教授をはじめとしたDiscourse Analysis Groupのメンバーとの日常的な交流と議論を通して、主に談話分析の分野についての最新の動向についての知見を広めた。

同学科では、社会言語学分野の教育プログラムにおいて、多言語環境（マオリ語、手話、英語と移民の継承言語）における言語使用の実態や言語接触による影響、言語政策、移民者コミュニティにおける継承言語保持の問題、言語についてのステレオタイプとアイデンティティなどのトピックが扱われている。多文化共存と言語接触についての研究の一環として、いくつかの講義やセミナーに陪席した。学生は、ふだんから多言語環境に接しているためか社会言語学的な概念やケーススタディについての反応が非常に良く、理解も深い様子であったことが非常に印象に残り、同時に、日本の言語文化環境において社会言

語学を考える場合との違いの大きさを実感させられた。

以上に加えて、同学科での活動としては、現在進行中である自らの研究内容について、学科が主催する公開セミナーで「A sociohistorical approach to language contact and change: The case of William Caxton as a translator and multilingual businessman」のタイトルで報告を行った（2023年10月27日）。その場で、また後日のやりとりで、社会言語学者だけではなく、統語論・形態論・比較言語学・言語教育などの専門家から有意義なフィードバックを得た。

【第2の領域】

ヴィクトリア大学のワイテアタ印刷所の所長であるSydney Shep博士、ウェリントンを中心に活動する印刷と製本の専門家集団、国立図書館(Alexander Turnbull Library / Te Puna Mātauranga o Aotearoa)の司書であるAnthony Tedeschi博士、国立博物館 (Te Papa) の司書Martin Lewis博士などとの交流を通して資料を収集し、知見を拓めた。これらの博物館と図書館(いずれもウェリントン所在)に収蔵されているニュージーランド最初期の印刷物(英国教会の宗教書)を直接手に取りながら話を聞く機会を得た。

ウェリントンを拠点とした情報収集だけでなく、現地調査も行った。ニュージーランドに初めて印刷機が到着したケリケリ、次に印刷所がおかれたパイヒアで、英国教会伝道協会の拠点であった場所を訪問し、関連資料を収集した。英国教会の印刷所はいずれも現存していないが、同時期に、パイヒアに隣接するコロラーレカ(ラッセル)にカトリック教会が開設した印刷所跡の博物館では、当時の印刷機が現在も使用できる状態で保存されている。この博物館で、当時の印刷についての資料を収集し、印刷過程の一部を体験することに加えて、ワイタンギ条約をめぐる英国教会伝道団とフランスカトリック教会の伝道団との間に存在した確執についての認識を新たにすることができたことも成果であった。

【第3の領域】

この領域については、当初の計画で予定していたものではなかったが、上記の活動を行うなかで次第に必要性が明らかになってきたものである。アオテアロアニュージーランドの先住民族であるマオリの言語 (Te Reo Māori) についての知識を得ること、マオリ文化と西洋文化が出会った19世紀の史実についての認識を新たにすることである。ヴィクトリア大学では教職員を対象にした、これらの目的のための教育プログラムが多数存在しており、それらへの出席が特別に許された。具体的にはマオリ語の複数のコース、業務のなかで日常的にマオリ語を採り入れるためのコース、マオリ先住民族と英国との間で交わされたワイタンギ条約をめぐる問題点とその前後の歴史を批判的に考察する複数のコースを、ヴィクトリア大学の厚意で履修させていただいた。マオリ語の講師のひとりVini Olsen-Reeder博士はSchool of Linguistics and Applied Language Studiesの修了生であり、多言語国家ニュージーランドの言語政策についての研究者でもある。ワイタンギ条約についてのコースの講師Peter Addis教授はSchool of Māori Studies / Te Kawa a Māuiに所属し、政府寄りではない立場からマオリをめぐる歴史・社会問題についての研究、教育と情報発信を行っている。これらの講師と、共にコースを受講したヴィクトリア大学の教職員から、異文化・多言語・言語接触についての貴重な情報と知見を得た。

【成果と謝辞】

本研究の成果は「海を渡った印刷技術：ワイテアタ印刷所(アオテアロアニュージーランド)の歴史と現在」(Printing Presses across the Waters: Wai-te-ata Press at Victoria University of Wellington, Aotearoa New Zealand)として『言語教育研究センター紀要 言語と文化』第27号で公刊した。研究中には、研究者、熱意ある優秀な大学院生と直接対話できる環境から多くの示唆を得た。また、設備の整った個人研究室と、膨大なデータとオンライン資料へのアクセスを含む図書館アカウントを与えていただいたおかげで、本研究課題の遂行は効率的なものとなった。ヴィクトリア大学とMeredith Marra教授を始めとするSchool of Linguistics and Applied Language Studies、そしてワイテアタ印刷所 (Sydney Shep博士) に心から感謝する。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構 (NUC)

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。